

「現代のプロメテウス」の背景： バイロン、パーシーとメアリ・シェリーのプロメテウス像

市川 純

序

ロマン主義時代におけるプロメテウス表象の研究は、あまり十分に行われてこなかった。もちろん、この時代におけるヘレニズム表象や、ギリシア神話の問題は様々なところで数多く論じられてきたが、プロメテウス自体にまとまった論考が編まれることはあまり無かった。先駆的なものとしては半世紀近く昔、クリスチャン・クロイツ (Christian Kreutz) が著した *Das Prometheusymbol in der Dichtung der Englischen Romantik* (1963) が挙げられ、その後の優れた論考としてはリンダ・M・ルイス (Linda M. Lewis) の *The Promethean Politics of Milton, Blake, and Shelley* (1992) がロマン主義時代のプロメテウス神話の受容を論じている。しかし、そこにメアリ・シェリー (Mary Shelley) の名は殆ど登場せず、ロマン主義時代のプロメテウス研究における大きな空白となっている。

一方、メアリ・シェリー研究においては、彼女が出版した最初の小説『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein, or the Modern Prometheus* 1818) の副題が「現代のプロメテウス」であるため、これまでしばしばプロメテウスについての考察がなされた。しかし、あくまで『フランケンシュタイン』におけるプロメテウスであり、ロマン主義詩人達が表象したプロメテウスと突き合わせた検証は十分に行われていない。そこで、本論考は『フランケンシュタイン』のプロメテウス像を意識しながら、このプロメテウス像確立の背景にあるロマン主義詩人、特にバイロン卿 (Lord Byron)、パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) が受容したプロメテウス像を古代ギリシアのテキストにまでさかのぼって検証する。そして、「現代のプロメテウス」との表象の違いを考察する。

「現代のプロメテウス」という副題はロマン主義時代において画期的な意味合いを持つ。この副題が示すように、主人公ヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) という人物はプロメテウス、しかも出版年である1818年において“Modern”とされるプロメテウスであった。この作品の中で、フランケンシュタインは明らかに危険な過ちを犯した存在として捉えられている。自然の摂理を侵して人工的に生命を作り、それを放置し、創造物の怒りを買ひ、復讐を受けて親族を次々と殺され、挙句の果ては自分自身も度重なる労苦に衰弱して死ぬという敗北的な姿をもって、プロメテウスと称されているのだ。これがメアリの提示したプロメテウス像である。

しかし、19世紀前半期において、プロメテウスをこのように敗れ去った姿で捉えたことは斬新なことであり、当時の一般的なプロメテウス文学、例えばバイロンやパーシー・シェリーに見られるプ

ロメテウス像とは大きく異なる。彼らは一様にプロメテウスを人類に恩恵を施したことでゼウスから迫害を受け、悲劇的運命を辿った英雄として讃えている。『フランケンシュタイン』のように危険な存在として作品内で罰せられ、殺されるなどということは、メアリ以外のロマン主義時代の文学にはありえない。何故このようなことが生じたのか。ロマン主義詩人のプロメテウス像とは何か。ギリシア神話におけるプロメテウスではなく、「ロマン主義詩人の」というバイアスが掛かったプロメテウスをここで確認し、メアリが『フランケンシュタイン』の副題に用いたプロメテウスが持つ独特の意味を考察する必要がある。フランケンシュタインという自らの過ちによって滅びる存在が、ロマン主義詩人達に礼賛されたプロメテウスの名を背負うことにより、どのような意味を帯びるのか、以下バイロンとパーシー・シェリーの作品を取り上げてその特徴を考察し、メアリの「現代のプロメテウス」はこれらの作品に対してどのような立場を取って書かれているのかを解明する。

1. バイロンによるプロメテウス像の再考

ロマン主義時代におけるプロメテウス像がいかなるものか、特にこの時代の代表的な文学作品に示されているプロメテウス像を見ていくと、そこにはある共通性を見て取ることができる。メアリ・シェリーとプロメテウスとの関わりを考察するのであれば、メアリの身近にいた人物の作品として、まずはパーシー・シェリーの『解放されたプロメテウス』（*Prometheus Unbound* 1820）が有名なものとして挙げられる。しかし、この作品が書かれる少し前、バイロンもプロメテウスを讃える詩「プロメテウス」（‘Prometheus’ 1816）を1816年に書いており、ここから考察を始める。

And the inexorable Heaven,
 And the deaf tyranny of Fate,
 The ruling principle of Hate,
 Which for its pleasure doth create
 The things it may annihilate,
 Refused thee even the boon to die:
 The wretched gift eternity
 Was thine – and thou hast borne it well. (‘Prometheus’ 18–25)

‘Prometheus’ は全59行で構成され、引用は全三連のうち、第二連の真ん中に当たる。作風は全体的にプロメテウスの苦しむ姿を強調している。

元々のギリシア神話では、プロメテウスはゼウスに反抗し、コーカサス山中に繋がれた。内蔵を鷹に啄ばまれ、しかも不死身の巨人族であるために死ぬことも出来ず、再生する内臓は常に鷹に食われ続け、永遠の責め苦を味わう。従って、プロメテウスを描く際にはどうしても責め苛まれる存在という要素が入ってくるのだが、バイロンはこの責め苦に対して、「天」（“Heaven”）は救いの手を

伸ばさず、「運命」(“Fate”)は耳を貸さない暴政であり、「憎しみ」(“Hate”)とともにプロメテウスを喜んで苦しめるという、残酷でサディスティックなイメージを重ねている。

ゼウスに罰せられて苦しむプロメテウスであるが、バイロンはプロメテウスを罰して喜んでいる者達を非難している。ここに示されるプロメテウスの姿を、バイロン作品の特徴の一つである、いわゆるバイロニック・ヒーロー (Byronic Hero) という言葉で形容されるような、憂鬱で孤独に苦しむ存在として捉えることは可能である。しかし、憂鬱な苦しみに苛まれるプロメテウスと同時に、プロメテウスを苦しめる者達の暴虐に対する強い非難というものをこの作品は示している。

当然、そもそもプロメテウスをコーカサスに縛りつけた張本人であるゼウスも批判される。

All that the Thunderer wrung from thee
Was but the menace which flung back
On him the torments of thy rack; ('Prometheus' 26-28)

雷神、すなわちゼウスはプロメテウスを苦しめた自らの行為によって自滅する。これは、バイロンがハロー校 (Harrow) 在学中のころから読んでいたとされる (Byron 457 note) アイスキュロスの悲劇『縛られたプロメテウス』に見られる思想である。その思想を表す端的な例を以下に引用する。

何もないぞ、どんな責苦、また手段でも、ゼウスがそれで、
私にあれを喚き出すよう仕向けることができるものなど、
このけしからん手足の枷がとり外されるまではな。
この上にも烈しく燃える電光を投げつけるなり、
あるいは吹雪の白い翼や、地鳴りの轟きで、
すべてのものを鳴動させ攪乱させつづけるがよい。
そんなものがちっとでも私を屈服させ、教えるようにはさせえまいよ、
そのため彼が大位を追われることに定まっている話を。(『縛られたプロメテウス』 989-96)

このアイスキュロスの作品に表れた、圧制者としてのゼウスに苦しめられ、強い怒りを抱くプロメテウス像は、後に述べるパーシーの作品同様、ロマン派詩人達の中である程度共通したプロメテウス解釈であるといえる。彼らの中では、ゼウスが圧制者であることには変わりなく、そこに強い反感を抱き、ゼウスの滅亡は当然とするシナリオが出来ていた。そして、滅びるゼウスに対し、プロメテウスは勝利者の側に立つという解釈をバイロンはアイスキュロスから受け継いでいるといえる。

このような神と巨人族の対立関係が存在する中で、果たして人間はどのような立場にあるのであろうか。神話上では、プロメテウスがゼウスに逆らって火、知識、ひいては文化を与えたことになっている。バイロンの「プロメテウス」にはこの辺りの詳細は描かれていないが、プロメテウスによって

恩恵を施された人類が、プロメテウスに重ねられていくイメージが重視されている。

Thou art a symbol and a sign
 To Mortals of their fate and force;
 Like thee, Man is in part divine,
 A troubled stream from a pure source;
 ...
 His wretchedness, and his resistance,
 And his sad unallied existence:
 To which his Spirit may oppose
 Itself — an equal to all woes,
 And a firm will, and a deep sense,
 Which even in torture can descry
 Its own concentered recompense,
 Triumphant where it dares defy,
 And making Death a Victory. ('Prometheus' 45-48, 51-59; emphases added)

つまり、プロメテウスは苦しみに満ちた運命を辿る人間の象徴とされ、人間はプロメテウスと同じように聖性を帯びた、神々しい存在となり、プロメテウスと同等の立場へと持ち上げられているのである。これは、ギリシア神話における神々に翻弄される人間の立場から大きく飛躍した考え方であり、プロメテウスと同等の存在価値を付与された人間像という一種ロマン主義的な考え方を示す。

また、バイロンの「プロメテウス」は苦しみが強調されて全体を覆っているために、憂鬱で暗い雰囲気濃いが、引用の最後にも見られるように、プロメテウス同様に孤独の中で悲しみと苦しみに喘ぐ人間は、ゼウスの暴政に惨敗した存在ではなく、むしろそんな苦境をものともせず勝ち誇り、「死」(“Death”) 自体を「勝利」(“Victory”) に変えてしまうという非常に輝かしい解釈を提示している。つまり、プロメテウスとプロメテウスに重ねられる人類は敗者ではなく勝利者なのである。そして、「死」と「勝利」という要素が出てくれば、これは『フランケンシュタイン』のテーマや主人公の名との深い関係性があることを見過ごしてはならない。

メアリ・シェリーとバイロンとの関係はそれぞれの作品相互の問題を論ずる上で、パーシー・シェリーに劣らず重要なものである。特に『フランケンシュタイン』を巡る創作背景には1816年にシェリー夫妻がスイスにあるバイロンの別荘、ディオダティ荘 (Villa Diodati) を訪れ、そこでバイロンが「我々一人ひとりが幽霊物語を書こうじゃないか」(“We will each write a ghost story” *Frankenstein* 177) と提案し、メアリはそれに答えて『フランケンシュタイン』を執筆したという経緯がある。この1816年という年は、バイロンが「プロメテウス」を執筆した年でもあり、メアリはバイロンの書

いた原稿を清書するという間柄だった (Seymour 314)。バイロンの「プロメテウス」はパーシーの『解放されたプロメテウス』と比べて小品であるため、『フランケンシュタイン』と比較して大々的に論じられることは少ない。しかし、作品執筆の背景に鑑みれば、両者には重要な結びつきがある。

『フランケンシュタイン』の物語上において、少なくとも一時的に人間は「死」に「勝利」している。墓場から集めた死体の断片を縫合し、そこに本文では語られない謎の科学的知識によって生命を与え、死者を生者へと蘇らせることに成功している。しかも、これを行った人間の名はヴィクター・フランケンシュタインという、まさに「勝利」(“victory”)を暗示する名前である。そして、この勝利者は作品タイトルの副題によって「現代のプロメテウス」と形容されている。しかし、ヴィクターが技術的に死体の蘇生を可能にすることができたところで、バイロンの詩のように彼の行為が讃えられている箇所はどこにもない。苦しみに耐え抜いて死に勝利するのではなく、科学の力で死体に生命を与えてしまったことによって、彼は苦しみの極みを味わうのである。

これは明らかにバイロンの「プロメテウス」のパロディである。しかも、メアリが行ったプロメテウス像のパロディ化は、伝記的にも全くの偶然に成されたとは考えにくい。では、どの程度意識的なのか。バイロンの「プロメテウス」に不満を持ち、違うプロメテウス像の樹立が必要であるという強い動機がメアリの意識にあったとまで考えることは出来ない。しかし、バイロンとは違うプロメテウス像の受容をしていたことは確かである。

暗示的で含みを持たせた中でのロマン主義文学におけるテーマのパロディ化であるが、このような作風は、『フランケンシュタイン』のみならず、その後のメアリ作品を分析する上で意識すべき特徴である。メアリ・シェリー研究が本格的な始まりを迎えた頃のフェミニズムを中心とした批評、つまりサンドラ・M・ギルバート (Sandra M. Gilbert) とスーザン・グーバー (Susan Gubar) による『屋根裏の狂女』(*The Madwoman in the Attic* 1979) からアン・K・メラー (Anne K. Mellor) を中心とする批評家においては、ことさらメアリの作品を男性のロマン主義詩人達に対する大きな批判的作品として解釈する向きが多かったが、メアリの作品自体には堂々と男性を批判する言説など殆ど見当たらず、日記や書簡を精査しても、彼らを直接的に批判するような言葉などない。

しかし、フェミニズムというバイアスをかけずとも、バイロンとの比較によって明確なように、メアリの作品はどうしても男性詩人が示していたテーマに反旗を翻してしまうところがある。堂々と批判しているわけではないが、批判的に読めるテキストを作り出すのがメアリなのである。

ところで、一体何故この時代にプロメテウスが詩のテーマとして取り上げられるようになったのであろうか。バイロンが描き、後に詳述するパーシーも描き、さらにそれをパロディにした形でメアリがプロメテウスを取り上げるこの連続性には何か歴史的理があるのではないだろうか。

ここで、当時の歴史的状況と詩人の意識について考察してみる。バイロンの場合、「プロメテウス」が書かれたのは1816年であり、しかも発表されたのは『シヨンの囚人、その他』(*The Prisoner of Chillon and Other Poems* 1816) という詩集の中であった。表題作にあるシヨンの囚人とは、ジュネーヴの宗教改革者フランソワ・ボニヴァール (François Bonivard) を指し、彼は同地を支配していた

サヴォワ公シャルル三世（Duc de Savoye Charles III）と対立したためにシヨン城に幽閉されていた。このシヨン城を訪れた折に受けたインスピレーションからこの詩集は完成され、バイロンのプロメテウス像にはボニヴァールの姿が見て取れる。

歴史的事実に当てはめれば、ボニヴァールを幽閉したシャルル三世は、プロメテウスを苦しめたゼウスとその味方達ということになる。「シヨンの囚人」と並んで同じ詩集に「プロメテウス」が並んでいるのは、バイロンが両者に共通性を見ているためである。権力者や体制側に苦しめられながらも信念を貫き通したボニヴァールの象徴としてプロメテウスが選ばれ、描かれているのだ。

また、『シヨンの囚人、その他』が書かれたのは『フランケンシュタイン』が生まれたディオダティ荘であり（Graham 19）、メアリと直接接する機会の多い場所であった。これは、後に『フランケンシュタイン』の副題に使われるプロメテウスが、バイロンの「プロメテウス」を意識した上で使われていることを示している。

2. パーシー・シェリーによるプロメテウス像の再考

フランソワ・ボニヴァールの存在がバイロンのプロメテウス像の形成に一役買っているのは確かであるが、それに加えて19世紀初頭を生きた詩人達に共通して意識されたのは、恐怖政治後のフランス革命と、革命の中で暴徒と化した民衆の姿である。それまで圧制によって抑圧されていた苦しみを一挙に爆発させ、王権を転覆させた革命の顛末は、ゼウスの統制に反逆したプロメテウスの姿と重なるものである。つまり、ゼウスは暴君、圧制、体制を象徴し、それに反抗したプロメテウスは民衆、或いは民衆を救う存在としての象徴と考えられるのである。

パーシーは、このようなフランス革命後の状況に反応し、『解放されたプロメテウス』において、暴政に対して憎しみや呪いを浴びせるのではなく、愛と赦しによって新たな方策を切り開くことを提示している（Watson 311）。これと比べると、バイロンの「プロメテウス」には赦しという観念は存在していない。プロメテウスを苦しめたもの達への呪いは最後まで解けてはならず、苦しみ抜くことにより、最終的には苦しみを超克したプロメテウス、及びその生き方を学んだ人間の力強い姿が描かれている。つまり、バイロンの方がより反抗的で、苦しめるものと苦しめられるものとの関係性は強く、プロメテウスとゼウスの関係は善と悪の対立にも近いものがある。

そして、バイロンはアイスキュロスを愛読していたゆえ、アイスキュロスの描いたプロメテウス像というものが意識的に取り込まれていると考えられるが、パーシーが描くプロメテウスはバイロン以上にアイスキュロスのプロメテウス像を意識している。

アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』は元々三部作悲劇の一つであり、この作品には『解放されたプロメテウス』が後続していると考えられるのだが、作品は残念ながら散逸している。パーシーの作品にはこの散逸作品の彼なりの補完という意味合いがあるが、忠実な復元を目指すよりもむしろ、アイスキュロスの描いたプロメテウス像に修正を加えたパーシー独自の物語の展開が試みられている。作品の序文には以下のようなプロメテウス像に関する私見が表明されている。

The *Prometheus Unbound* of Aeschylus, supposed the reconciliation of Jupiter with his victim as the price of the disclosure of the danger threatened to his empire by the consummation of his marriage with Thetis. Thetis, according to this view of the subject, was given in marriage to Peleus, and Prometheus, by the permission of Jupiter, delivered from his captivity by Hercules. . . . But, in truth, I was averse from a catastrophe so feeble as that of reconciling the Champion with the Oppressor of mankind. (*Prometheus Unbound* 201; emphases added)

パーシーはアイスキュロスの作品における「勝利者」(“Champion”), つまりプロメテウスを「圧制者」(“Oppressor”)であるゼウスと和解することを生温いとして退けている。確かに、パーシーの作品では、プロメテウスが呪いを捨てても、ゼウスと和解するわけではなく、ゼウスは地獄の最下層部にあるタルタルス (Tartarus) に飲み込まれて滅ぶ。これが可能になったのはプロメテウスが圧制者ゼウスへの憎しみを捨て、呪いを解くことで愛するアジア (Asia) と一緒になったことによる。つまり、永遠の愛の力の実現によって、圧制者も滅びるべきであることを寓意的に表しているのである。パーシーにおいて、プロメテウスは “the type of the highest perfection of moral and intellectual nature, impelled by the purest and the truest motives to the best and noblest ends” (*Prometheus Unbound* 201) であるとされている。そのため、このような存在がゼウスとの争いを和解という形で解決するはずはない。プロメテウスはゼウスより完成された、高度な性質を持っており、こういった解釈はギリシア神話において認められないパーシー独自の思想である。そして、この思想ゆえに、ゼウスはたとえ神々の権力関係において力を持っていたとしても、内面的には劣ったものとみなされ、プロメテウスの前には滅ばざるを得ない。

ただし、プロメテウスが行ったことには問題が無いわけではない。アジアがプロメテウスの所業を語る箇所には以下のような記述が見られる。

He gave man speech, and speech created thought,
Which is the measure of the universe;
And Science struck the thrones of earth and heaven,
Which shook, but fell not; and the harmonious mind
Poured itself forth in all-prophetic song;
And music lifted up the listening spirit
Until it walked, exempt from mortal care,
Godlike, o'er the clear billows of sweet sound;
And human hands first mimicked and then mocked,
With moulded limbs more lovely than its own,
The human form, till marble grew divine;

And mothers, gazing, drank the love men see
 Reflected in their race, behold, and perish.
 He told the hidden power of herbs and springs,
 And Disease drank and slept. Death grew like sleep. (*Prometheus Unbound* 2. 4. 72-86)

人間に様々な知識を与えたことによって支配者であるゼウスの怒りを買ひ、プロメテウスが縛られることになったのはアイスキュロスの作品と共通しているが、パーシーはプロメテウスが人類に与えたものをただの知識、文化、などの抽象的な概念に留めず、具体的な事物を設定している。神話によって語られていた事象は科学によって解明されることが示され、『フランケンシュタイン』との関係から考えれば人造人間の創造すら連想させる記述である。パーシーはプロメテウスが人類に与えたものを、文明の発展という観点から恩恵とみなし、医学、薬学の知識による負の側面を読み取ってはいない。これらの点に関しては楽観的なのである。これらの負の側面を際立たせたのが他ならぬ『フランケンシュタイン』であり、パーシーの神話世界で語られていた科学的知識を近代世界において極限まで実現させることの恐ろしさを描いている。それを「現代のプロメテウス」という言葉で副題に冠したことは、パーシーの作品と対照させれば非常に皮肉めいたものだ。

『フランケンシュタイン』の副題を問題にする際、これまでの研究では、バイロンとパーシーの作品におけるプロメテウス表象自体をギリシア神話との関連の中で敢えて疑問に付すことは無かった。つまり、メアリがプロメテウスに何かしら危険なものを感じて副題に用いたとするならば、バイロンやパーシーと同じ素材のプロメテウスを相手にし、捉え方が異なると解釈してきたのである。しかし、ここで気をつけなければならないのは、彼らがどこからプロメテウス像を獲得したのかという問題である。バイロンもパーシーもアイスキュロスを大事にしていたが、アイスキュロスの描いたプロメテウスだけがプロメテウスの実像を示しているのだろうか。ここにはアイスキュロスによる価値観が多分に見られるのではなからうか。プロメテウスはあくまで神話上の巨人族の一人であり、『縛られたプロメテウス』はアイスキュロスの一作品に過ぎないのではないか。

この問題は、特にパーシーとメアリによる読書歴によって再考すべきものである。メアリの日記には自身とパーシーの読書リストが付いており、彼らの作品のソースを探ることができる。ここからプロメテウスの素材を検証すると、パーシーによる取捨選択が行われていたと考えられるのだ。

アイスキュロスに関してメアリの日記を紐解くと、1816年のリストに“Prometheus of Eschylus – Greek” (*Journals* 1: 98) という記述があり、さらに、1817年7月13日の日記には“S tra[n]slates Promethes Desmotes and I write it” (*Journals* 1: 177) という記述が見られ、シェリー夫妻がギリシア語でアイスキュロスを読み、パーシーによる翻訳を口述筆記していたことが分かる。その後の日記を追うと、同年8月5日において“S. finishes the plays of Aeschylus” (*Journals* 1: 178) という記述が見られ、『縛られたプロメテウス』を含むアイスキュロスの悲劇の翻訳が終わったことを窺わせる。

ただし、同じ読書リストを検証するに際して無視してはならないのは、アイスキュロス以外のギリ

シア詩人によるプロメテウス像である。アイスキュロスの読書以前に1815年のパーシーの読書リストには“Hesiod”の名が登場する (*Journals* 1: 92)。上の読書リストではヘシオドスの何を読んだのかは分からないが、彼の作品として考えられるのは、『神統記』か『仕事と日々』、或いはその両方を読んだということかもしれない。そして、ヘシオドスによるプロメテウス像を見ることによって、パーシーが古代ギリシアから受け取った、或いは受け取らなかったプロメテウス像というものが分かるのである。

プロメテウスがゼウスの怒りを買って責め苦に苛まれ、縄目に繋がれ、鷹に内臓を啄ばれるのはアイスキュロスにも共通する神話的要素であるが、ヘシオドスはプロメテウスの苦しみよりもその狡猾さに描写の多くを費やしている。

神々と人間が争っていた時代に、プロメテウスは牡牛を切り剖いてゼウスと人間双方に捧げるのだが、ゼウスの前には牡牛の肉と脂肪たっぷりの臓物を胃袋で包んで配置し、一方の人間には牡牛の白い骨を脂肪で包んで置いてしまう。この不公平な分配に対して、ゼウスとプロメテウスは以下のようなやり取りをする。

「イアペトスの子よ すべての神々のなかでもとりわけ誉れ高いものよ
友よ 汝は なんと公平ならざる頒け方をしたのか」
不滅の智をもつゼウスは こう言って 彼を咎められた。
すると 策に長けたプロメテウスは また 答えて言われた
穏やかな微笑みを浮かべながらも 巧みな謀りごとを 忘れずに。
「常磐にいます神々のうちでも ことのほかに輝かしく 並ぶもなく偉大なゼウスよ
これらの頒前のうち あなたの胸うちの御心があなたにお命じになる方を どうかおとりくだ
さい」
企みの心から 彼は こう言われた。だが不滅の智弁えるゼウスは
事の次第を察知し 企みに気づきそこなうことはなかったのだ。

(『神統記』543-51; emphases added)

ゼウスに対して「不滅の智」という言葉を何度も用いるところや、対するプロメテウスを「策に長けた」と評したり、「巧みな謀りごと」、「企み」という表現を用いたりするところなど、両者に対するヘシオドスの評価の違いは明確である。アイスキュロスのように、ゼウスを不正な圧制者と捉え、プロメテウスを悲劇の主人公に仕立て上げる意図は全く見られず、むしろ狡猾さに長けたプロメテウスに騙されないゼウスを讃える姿勢の方が強いのである。これは『神統記』全体に見られる精神である。

たとえパーシーが『神統記』を読んでいなかったとしても、『仕事と日々』においてもヘシオドスのゼウスに対する肯定的評価は変わらない。『仕事と日々』では、プロメテウスがゼウスを騙して火を盗み、それを人間に与える便宜を図ったため、怒ったゼウスが人間に災厄を与えるという恐ろしい

側面も語られてはいる。しかし、ヘシオドス自身の言葉として、以下のような言葉が歌われるのだ。

人間にはゼウスが正義を賜った——これに優って善きものはない。
 正しきことを心得て、これをあえて語る者があれば、
 遙かをみはるかすゼウスは、この者に幸を賜う。（『仕事と日々』279-81）

このような対照的なプロメテウス像をパーシーはそれぞれ知っていたはずである。それなのに、彼の書簡にはヘシオドスに言及した箇所はどこにも見当たらず、読書記録には名前が登場するだけなのである。そして、『解放されたプロメテウス』の序文においてはひたすらアイスキュロスの作品だけが問題となっている。明らかにプロメテウス像の取舍選択が行われているのだ。

ロマン主義時代にプロメテウスが頻繁に表象された理由に、アイスキュロスの作品が、翻訳など様々な版が出版され、テキスト自体が入手しやすかったという説がある（Lewis 163-64）。しかし、たとえそのような物理的事情があったにしても、パーシーはアイスキュロスのような悲劇的運命を辿った英雄としてのプロメテウスを描いたものだけでなく、ヘシオドスのようにゼウスを欺く悪知恵に長けたプロメテウス像も知っていた。そして、恐らくパーシーと同じ主題を近い時期、しかも互いに接触し合う場所で書いていたバイロンも、プロメテウスをいかに描くかという問題に関してパーシーと意見交換していた可能性が十分ある。その中で、ヘシオドスのように、英雄視しないプロメテウス像を考える機会も十分あったはずである。それなのに、アイスキュロス作品のような英雄的プロメテウス像ばかりが強調されているのは、意識的な選別が行われていると考えられる。バイロンやパーシーにとってはヘシオドスによるプロメテウス像は必要とされていないのである。その理由は、ボニヴァールへの関心やフランス革命からナポレオン戦争に至る歴史的状況により、強大な権力によって抑圧される民衆とその解放という意識が喚起されていたからであろう。

また、パーシーの場合、『解放されたプロメテウス』の序文には“The only imaginary being resembling in any degree Prometheus, is Satan”（*Prometheus Unbound* 201）という言葉があり、ジョン・ミルトン（John Milton）の『失樂園』（*Paradise Lost* 1667）におけるサタンがプロメテウスに重ねられている。そこで、クリス・ボルディック（Chris Baldick）はロマン派文学におけるプロメテウス崇拝を、ヘレニズム化された異教的傾向と分析している（Baldick 41）。パーシーの記述は、当時の歴史的・政治的問題のみならず、異端主義的傾向がプロメテウスの流行現象に寄与していたことを示している。

『失樂園』は『フランケンシュタイン』のエピグラフに用いられているのはもちろん、怪物も『失樂園』を作中で読み、自らをサタンに重ねている。サタンと怪物は共に危険な対象として捉えられ、メアリはパーシーのようにプロメテウスを礼賛することがますますできない。メアリが怪物をサタンと重ねている一方、パーシーはプロメテウスとサタンを重ねている。このような構図がある限り、メアリは怪物そのものを礼賛できないのと同様、プロメテウスを礼賛することもできないのである。プ

ロメテウスの圧倒的な力は、メアリには危険な要素を孕むものであり、同じロマン主義時代においてプロメテウス受容の異なる様相を示すものなのである。

結論

メアリが「現代のプロメテウス」という言葉を打ち出した際、同時代の詩人達による英雄としてのプロメテウスが存在していたことを、敏感に感じていたはずである。その中で敢えて英雄ではなく、自滅的で、最終的には勝利者であるより敗北者に他ならないヴィクターに対し、これが現代におけるプロメテウスだというメッセージを付けたことは極めて警告的なことである。ギリシア神話内でプロメテウスが人間に様々な技術を与えた時、それはあくまで原始的な技術であり、科学室での実験や、18世紀後半以降の産業上の技術革新などと程遠い。しかし、この問題を「現代のプロメテウス」という副題を用いることによって、メアリは告発できた。これは、当時のプロメテウス像の虚を衝いている。メアリは原始のプロメテウス像に危険な要素を察知しているのである。そのため、自分の周辺人物達がアイスキュロスのような英雄的プロメテウス像を表象しているのに対し、一人そこから離れ、批判的にプロメテウスのイメージを使用した。どちらかと言えば、アイスキュロスよりもヘシオドスに近い立場であることが、ギリシア古典を参照することで明確になった。

ボルディックは、ヴィクターがプロメテウスであればそれを罰するジュピターはどこにもいないと主張するが (Baldick 42)、彼は怪物を通して作者メアリによって十分罰せられており、その意味ではメアリが全能の神としてジュピターの役割を担っている。そして危険な存在としてのプロメテウスを『フランケンシュタイン』において罰するに至ったのである。これは、ロマン主義詩人によるアイスキュロスのプロメテウスを礼賛する風潮の中で、メアリ・シェリーがそれと異なるプロメテウス受容をし、独自の立場を打ち出した事実として重要である。

Works Cited

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-Century Writing*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Byron, George Gordon, Lord. 'Prometheus.' Vol. 7 of *The Complete Poetical Works*. Ed. Jerome J. McGann. Oxford: Clarendon, 1986.
- Graham, Peter W. *Lord Byron*. New York: Twayne, 1998.
- Lewis, Linda M. *The Promethean Politics of Milton, Blake, and Shelley*. Columbia, MO: U of Missouri P, 1992.
- Seymour, Miranda. *Mary Shelley*. London: Murray, 2000.
- Shelley, Mary. *Frankenstein, or the Modern Prometheus*. Vol. 1 of *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Ed. Nora Crook. London: Pickering, 1996.
- . *The Journals of Mary Shelley 1814–1844*. Ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. 2 vols. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Thomas Hutchinson. Oxford: Clarendon, 1917.
- Watson, John Richard. *English Poetry of the Romantic Period 1789–1830*. 2nd ed. London: Longman, 1992.

- アイスキュロス著、呉茂一訳『縛られたプロメテウス』岩波文庫、岩波書店、1974。
ヘシオドス著、廣川洋一訳『神統記』岩波文庫、岩波書店、1984。
ヘシオドス著、松平千秋訳『仕事と日』岩波文庫、岩波書店、1986。